

オーライ！ニッポン大賞（4件）

オーライ！ニッポン大賞並びに審査委員長賞は、都市と農山漁村の共生・対流を促進するため、「都市側から人を送り出す活動」、「都市と農山漁村を結びつける活動」、「農山漁村の魅力を活かした受け入れ活動」等について優れた貢献のあった団体もしくは個人を対象としています。

☞地域・企業・大学など幅広いネットワークを活かし農村地域の開発事業を展開－ 特定非営利活動法人 えがおつなげて（山梨県北杜市）

北杜市須玉町増富地区において、構造改善特別区「増富地域交流振興特区」の認定のもと、地域資源を有効に活用した持続可能な農村地域社会を再生し、地域活性化につなげていこうと都市農村交流活動を実践。遊休農地約3haを賃借し、都市部からボランティア等を含めて7500人が開拓に参加し農園を復活させ体験フィールドとして活用。活動4年半で体験プログラム(年30～40回)3200人が参加、都市交流キャンプ(年4～5回)には1200名が参加している。



☞若狭湾の豊かな自然をフルに活用した体験観光事業を実践－ 社団法人若狭三方五湖観光協会（福井県若狭町）

若狭湾を舞台とした漁業と里山を中心に展開する農業を核にした体験型観光事業に取り組んでいる。特に県外中学生などを対象に5～7月の間に1泊2日もしくは2泊3日の行程で行われる「海の体験学習(定置網見学、釣り、干物作りなど)」は、平成19年度には44校5400人が訪れ、常神半島4地区の漁村民宿を中心に受け入れている。今年度は、従来の団体客に加え、個人客を対象に「若狭・三方五湖まるかじりツーリズム」を本格始動させている。



☞伊座利の灯を消すな！地域住民一人一人が主役の草の根地域づくり活動－ 伊座利の未来を考える推進協議会（徳島県美波町）

地区のシンボルである「伊座利校」を残そうと、地域住民が一体となって自主的・創造的な地域おこしに立ち上がり、「交流」をキーワードに、草の根的な地域づくり活動を行っている。都市部でのPR活動や地域資源を活かした体験活動、また全住民による海岸や川・道路の清掃など、住民一人一人が積極的に取り組んでいる。その結果、活動当初約100人だった人口が約130人に増加。都市部で組織する「伊座利の未来を考える応援団員」も600名から増加し、1000名を有している。



☞広域の強みを生かした豊富なプログラムと人材で環境体験型修学旅行を受け入れ－ 幡多広域観光協議会（四万十市他5市町村）（高知県四万十市）

高知県西南部に位置する幡多地域の6市町村が連携し、平成7年に全国に先駆けて環境体験型修学旅行の受入組織として本協議会を設立。広域エリアの「総合受入窓口」として誘致から受入、精算まで一括して取り組んでいる。各地域の受入組織や個人をネットワーク化し、現在では100を超える体験プログラムを提供し、インストラクターも幡多地区全体で500名を超えるなど、充実した体制で平成19年度は受入21団体、2,349人を受け入れている。



(別紙3)

オーライ！ニッポン大賞グランプリ候補（2件）

*オーライ！ニッポン大賞グランプリ候補とは、都市と農山漁村の共生・対流の観点から、より多様な活動事例を紹介することで、国民運動の推進に資することを目的に、企業・団体・各省が実施する表彰事業と連携し、その中から、「オーライ！ニッポン大賞」の内容として推薦された事例です。

（特定）持続可能な社会をつくる元気ネット（市民が創る環境のまち“元気大賞”） 推薦事例

☐新たな持続可能な経済活動を構築し、地域の自立を目指す取り組み— 場所文化フォーラム（東京／十勝）（東京都中野区）

地域を元気にし、真に豊かな日本を創造したいという思いを持った有志が設立の任意団体。場所文化の創造によって、地方と都市の人々の新たな交流の確立等を促し、地域への新たな資金流入と域内での資金循環の仕組みを構築し、地域の自立を目指している。一次産業（特に農業）の価値を再確認し、持続可能な地域経済の在り方を年数回の場所文化ツアー、月例の勉強会、各種交流会や講演といった活動を重ね、その具体的なモデル、かつ情報発信基地として、丸の内国際ビル地下1階に場所文化レストラン「とかちの…」をオープンした。



社団法人 日本観光協会（優秀観光地づくり賞） 推薦事例

☐日本を代表する市民・NPO・企業・行政のパートナーシップによるグランドワーク活動— 三島市（街中がせせらぎ事業）（静岡県三島市）

古くから富士山の伏流水が街中に湧きだす三島市は、1960年代以降の工場進出により、湧水が減少し水辺の環境は悪化、源兵衛川は汚れた川となり、この状況を憂えた市民が1990年代初めふるさと原風景を取り戻そうと立ち上がり、市民・NPO・企業・行政のパートナーシップによる水環境の再生活動を展開。今では子供達が水遊びをする姿が日常的に見られるまでになった。また、市民協働の「アダプトプログラム」「街並み協定づくり」「せせらぎウォーク」「みしま竹あかり」等の多彩なイベントにより街並みの賑わいが再生した。



審査委員長賞（6件）

☞1人の思いが地域を動かし、短期・長期の自然体験活動を実践—

特定非営利活動法人 自然体験村虫夢ところ昆虫の家（北海道北見市）

北海道道東オホーツク沿岸に位置する北見市常呂町の豊かな自然を生かし、小学4年生～中学3年生を対象に自然体験活動事業を実施している。こども達が自然と触れ合える施設をつくりたいという思いを持った一人が、自費で投じ整備を始めた事をきっかけに、2001年にNPO法人として組織体制を整備。原則月1度開催する「週末自然体験活動」や夏休み期間に14日間の自然体験合宿を行う「いきいきオホーツク自然体験村」に取り組んでいる。



☞山村の暮らしをもっと豊かに提案するアイデア満載の活動—

共生のむら すぎさわ（山形県金山町）

杉沢地区は金山町で最も山奥に位置する小さな集落で、1998年に第3セクターのホテルのオープンに合わせて、体験と民泊の村として「共生のむら すぎさわ」をスタート。①自然と人間、②山村と都市、③歴史と未来の3つの共生を掲げ、「哲学と交流とメープルの里」をキーワードに、山里哲学講座や山里の暮らし体験を受け入れる「体験のむら」、都市住民と空き家を買取り、休暇と交流の場として活用する「山形 金山スロー村」など多様な取り組みを実践している。



☞都市部（企業）からの農林業体験による青少年育成活動の実践—

特定非営利活動法人 市村自然塾関東（神奈川県松田町）

平成13年に、青少年の健全育成の一助になればという思いから、株式会社リコー及びリコー三愛グループの創業者である市村清氏の生誕100年を記念して設立されたNPO法人で、『生きる力を大地から学ぶ』を基本理念に、「農耕」「自然体験」「共同生活」を基礎に置いた自然体験活動を行っている。参加の対象は、小学4年～中学2年の異年齢の児童・生徒、男女各28名ずつで、隔週末2泊3日年間18回開催し、春先の畑作りから収穫までの通年型プログラムを実施している。今年で6年目を迎え、243名を受け入れている。



☞模擬的家族を形成しての約2週間の共同生活体験を受け入れ—

輪島市「子ども長期自然体験村」実行委員会（石川県輪島市）

平成11年度に文部省(当時)・農林水産省連携の「子ども長期自然体験村」事業を契機に以降9年間、横浜市と石川県内のこども達(小学4年生～中学3年生まで)をそれぞれ30名ずつ計60名、約2週間受け入れる宿泊体験事業を実施している。1班10人程度にわかれて異年齢・異地域の集団で模擬的な家族を形成して協同生活体験を送りながら、輪島の自然体験や農林漁業体験など地元住民等の協力の下で受け入れている。



(別紙3)

☞生徒と教員と就実地区自治会による手作り体験プログラムによる交流—
就実高等学校（岡山県岡山市）

平成16年に創設百周年を向かえた就実高等学校の歴史を検討する過程において、北海道旭川市に「就実」という地区があることを発見。また学校近くを流れる旭川と旭川市が同名であるなどの共通点をきっかけに交流を開始。修学旅行は交流3年目から始まり、生徒と教員と就実地区自治会が連絡を取り合いながら準備を進め、生徒達は就実地区に約半日間滞在し、カボチャの植え付け作業や記念植樹等を行うプログラムで地域と交流を深めている。



☞地元専業農家の6次産業の確立と都市農村交流による地域活性化の実践—
有限会社 シュシュ（長崎県大村市）

地元専業農家8戸が、地域農業の活性化を図るため、地域の農産物の生産、製造、加工、販売の6次産業の確立を目指すと共に、都市住民との交流を図り、地域農業の振興や農業後継者の育成を行うことを目的に平成12年に開業。以来、農産物販売所の運営、地元農産物を使用した加工品の販売、また収穫体験等による食育体験等修学旅行等の受け入れを行っている。今年度からは団塊世代対象に農業塾を開講し、毎月1回の講座に県内外から84名が受講するなど、取り組みの幅を広げている。



ライフスタイル賞（4件）*敬称略

Iターン等により農山漁村において個性的で魅力的な新しいライフスタイルを実践している方が対象としています。

馬を核に地域と都市を結ぶグリーン・ツーリズム活動を実践中—

中野渡 利彦（青森県十和田市）

満50歳を機に、残りの人生を馬と共に歩むため、十和田市内で5頭の南部馬を飼い始め、乗馬を中心としグリーン・ツーリズム活動に着手。乗馬指導者の資格を取得し、乗馬セラピーなど福祉的な乗馬を実践するNPO法人を設立。平成17年度には「いのちのふるさと里山の森を守る会」を設立。東京にふるさと応援隊を結成し、都市農村交流による里山保全活動を行っている。



山村留学で山村に元気を生み出す“だいだらぼっち”のお母さん—

梶 さち子（長野県泰阜村）

都内幼稚園勤務を経て、1986年に山村留学「だいだらぼっち」立ち上げのため移住。それ以来、23年間子ども達と田舎暮らしを営んでいる。山村留学の卒業生は300人以上で、当初は地元の強い反発もあったが、地域活動や日頃の何気ない挨拶などで地域に溶け込み、相互交流の図れる場を作る努力により、地域住民の理解を得て、現在では村の人口に匹敵する年間2000人以上人々が自然体験に訪れている。



医師の知識を活かした地域密着型のグリーン・ツーリズムの実践—

金木 美智子（富山県立山町）

立山町東谷地区が薬用植物栽培に適した環境であり、かつ、過疎化による耕作放棄田(棚田)を有効活用できることに着眼し、自らが立山町グリーン・ツーリズム推進協議会の委員となり、薬用植物栽培を活用して、都市住民との交流を促進。医師としてグリーン・ツーリズムの魅力を探究し、農村滞在における免疫の向上等について講演を実施。近年のクマの出没が深刻化する中、人と動物が共生する山里の再現を目指し、「どんぐりころりん会」を発足して取り組んでいる。



自ら仕事場を創り、自分の故郷で豊かなライフスタイルを実現中—

大西 かおり（三重県大台町）

大学卒業後3年間、フィリピンに青年海外協力隊へ出掛け、その後、日本環境教育フォーラム自然学校指導者養成講座を受講するなど経験し、平成13年に自分の故郷で生活する夢を実現するため働く場所が必要と「大杉自然学校」を設立。実習生制度やボランティア制度など都市農村交流に取り組む一方、自宅での薪風呂や祖父の畑仕事を手伝い、地域ぐるみの行事に出席するなど、本当の豊かさを模索するライフスタイルを楽しんでいる。

